常葉大学短期大学部紀要第53号
13-28　2022.

毛利貞斎著『増続大広益会玉篇大全』研究の現在
―データベース化に先立って―

Present State of Research on Mouri Teisai's *Zouzokudaikouekikaigyokuhentaizen*
: Before Creating a Database

中　野　直　樹
NAKANO Naoki

キーワード：『増続大広益会玉篇大全』、毛利貞斎、古字書、データベース
Keywords：*Zouzokudaikouekikaigyokuhentaizen*, Mouri Teisai, Old dictionary, Database

抄録

毛利貞斎著『増続大広益会玉篇大全』は、豊富な内容を持つ字書と言われながらも、未だ研究が充分になされているとは言い難い。今回作成を企画しているデータベースは、本書の研究だけでなく、広く近世期に流通していた漢字の音訓の参照を容易にし、国語学・国文学だけでなく広く他分野の諸課題解決のツールになることが期待される。本稿では、データベース作成の前に、『増続大広益会玉篇大全』について本文研究がどこまで進展しているのかについて報告する。

1　はじめに

江戸時代中期に活躍した儒者、毛利貞斎は多作な人物として知られている。その著作の中に本稿で取り上げる『増続大広益会玉篇大全』（以下、「玉篇大全」）がある。本書は残存する版の数から、近世期～明治期にかけてかなり流通したと考えられ、この時期の中心的な字書として字書史の中に重要な位置を占めている。

本稿では、「玉篇大全」の本文・注文をデータベース化するにあたり、本書の研究がどこまで進んでいるのか、また、本書をデータベース化する理由について報告・説明したい。「玉篇大全」はこれまで不思議と注目度が低く、近世期の辞書の概説の類でも触れられないか、簡単な説明のみとなっている。なぜこのようになっているのかは分からないが、「玉篇大全」が大部であり、かつ版種が多く取り扱いにくいことや、「玉篇大全」の成立時期が古辞書の範疇に入りにくいわりに[1]、本文の構成は三省堂の『漢和大字典』のような

[1] 古辞書は慶長年間以前に成立した辞書を指すことが多い。Cf.『古辞書を学ぶ人のために』、『増訂古辞書の研究』。

近代的辞書の前段階に留まっているということなど、古辞書研究と近代辞書研究の関心の隙間に位置してしまっていることがその理由かもしれない。

しかしながら、「玉篇大全」の研究課題は多く、例えば本文および首書に付された和訓の出どころや、字音の体系、後世の字書への影響など国語学的に検討すべき課題が挙げられる。また、版種ごとの本文異同など文献学的にも検討すべき課題もある。近世期によく流通した字書であるから、当時の言語生活にも影響を及ぼしたであろうことも考えられる[2]。今回企画するデータベースは、「玉篇大全」の注文の参照および他資料との比較を容易にし、上記のような課題解決のツールになることが期待される。

2　「玉篇大全」についての研究概観

「玉篇大全」諸本の概要について知るには、関場氏の一連の論考が最も詳しい（関場(1977・1994・1997・2007)。関場（2007）において諸本の整理が一旦完了し、本書の著者である毛利貞斎の略歴と「玉篇大全」の概略および元禄五年〜明治四十四年のものまで氏が確認した版について17類に分けて書誌情報が示されている[3]。

「玉篇大全」の首書の典拠についての考察には、大岩本（2011・2013）、菊田（1985）がある。「玉篇大全」の巻一には首書の典拠となった書目が105種列挙されているが、大岩本氏はそれぞれの典拠の「玉篇大全」における引用回数を示したうえで、実際には書目に挙がっているだけで使用されていない典拠もあることを明らかにし、また、所謂海篇類の引用について逸文が含まれている可能性についても言及した。引用回数の多い典拠については、それがどのように引用されるかについても考察がある。菊田氏は本書にみられる『和名類聚抄』の注文について、「玉篇大全」において『和名類聚抄』が特定の部首に偏って引用されていること、引用の際に摘記が行われていること、使用された万葉仮名から二十巻本に近い本を使用したであろうことなどを指摘した。

注文についての研究には、佐藤（2021）があり本書の字音の合拗音表記について言及する。氏は本書の合拗音にハ表記（クハイ、クハンの類）と、ワ表記（クワイ、クワンの類）があり、合拗音表記の95％がハ表記であること、同様の表記は『落葉集』の「小玉篇」にも見られることを指摘した。

山田（1959）では、近世以降の漢和辞書の発展史が概説されており、近世から近代の漢和辞書へのつながりが示される。山田氏の論考の付表「本邦辞書史概説」は、近世の『大広益会玉篇』の付訓本から明治期の漢和辞典まで山田氏が確認した多くの本を列挙したもので、「玉篇大全」の先行書や後継書と思われるものが挙がっており、「玉篇大全」がどのように発展してきたのか調査する際参考になる。

林（1989）は、「玉篇大全」の本文の構造についての概説を行っており、関場氏が報告した諸本にさらに3類追加している。また、「玉篇大全」に先行する画引きの『大広益会

---

[2] 本書は幕末の日本語学者レオン・ド・ロニーも『若干の日本語辞書に関する考察』で触れている（大橋・柳浦（1994））。また、琉球王国にも本書が伝播していたことが指摘されており（水上(2014)）、その勢力の大きさはかなりのものであったと考えられる。

[3] 特に、元禄五年版の未刻部分が徐々に埋められていき、天保五年版の段階に至ってすべて埋まった点などは重要な指摘である。

玉篇』（特に寛文三年版および天和三年版）との関係および、後代の字書への影響（『新刻増字大広益会玉篇大成』・『新刻訂正新増字林玉篇大全』等）について主に和訓に注目する形で言及する。

本書の紹介・概説については岡井（1933）、岡田（1936）、山田（1981）、関場（1992）、岡島（2001）があり、著者等について触れる。

筆者が目標とする「玉篇大全」の本文・注文のデータベース化は、劉・李・池田（2015）にて平安時代漢字字書総合データベースのデータ拡張の候補となっていたため予定されていたが、その後休止している[4]。

以上、「玉篇大全」についての先行研究をごく簡単に見てきた。現状では、「玉篇大全」の首書の典拠の解明や、版の種類の確認・検討に研究が集中しており、版によって本文異同がどうなっているか、言語資料として「玉篇大全」がどう位置付けられるかといった研究は少ない。理想的には本文・注文について版ごとに異同はあるか[5]、言語資料として本書がどのように扱えるかの問題をクリアしてからデータベース化はなされるべきではあるが、解決にはまだ時間がかかると思われる。そこで、「玉篇大全」本文の研究と同時進行でデータベース化作業を進め、本文研究の知見からデータベースの情報に反映させた方が良い点がでてきた時点で、適宜それをデータベース側に取り入れるという形で今後進めていきたいと考える。

【図１】早稲田大学図書館蔵元禄五年版
『増続大広益会玉篇大全』（本文冒頭）

---

[4] 池田証壽氏・劉冠偉氏より御教示。

[5] 福田（2003）では「紆」字をめぐって諸版に異同があることが既に報告されている。おそらくこのほかにも類例があるものと思われる。

3　「玉篇大全」について

3－1　著者

著者の毛利貞斎については、前述の関場氏の論考が詳しい。著者の来歴については不明な点が多いが、池永秦良『諸家人物誌』（寛政四年刊）、梅園堂都の錦『元禄太平記』（元禄十五年刊）などに若干の記述がある。それらによると、名は瑚珀で字は虚白、貞斎は号であるという。大坂出身で京都にて講義を行い、著作多数でありその業績は宇都宮遯庵と並ぶとする。『元禄太平記』では貞斎に対する評価は厳しく、外題学者として宇都宮遯庵らとともに挙げられており、名誉ばかりを求めて書数を重ねていると書かれている。貞斎の生没年については不明なものの、関場氏は貞斎の活動時期について著作等の記述から、おおよそ延宝三年（1675）から享保十年（1725）の約五十年間と見る。

3－2　諸本

関場（2007）によれば、「玉篇大全」の版は以下の通りとなっている（17類61種）。

1、元禄五年（1692）版　鍵屋善兵衛・澤村昌益版/永田調兵衛・林氏治兵衛版/無刊記版
2、享保二十年（1735）版　浪華五書肆版/浪華六書肆版（二種有）/定栄堂吉文字屋市兵衛発売本
3、安永九年（1780）版　浪華六書肆版/定栄堂吉文字屋市兵衛発売本
4、天保五年（1834）版　浪華六書肆版/浪華六書肆後印七書肆発売本/浪華六書肆河内屋喜兵衛発売本（二種有）
5、秋田藩明徳館版（天保九年（1838）刊）
6、無刊記本（首巻を除き5と同版）
7、嘉永七年（1854）版　大阪四書肆本/四書肆敦賀屋九兵衛版/四書肆河内屋喜兵衛等発売本/大阪六書肆本/六書肆象牙屋治郎兵衛等発売本/六書肆河内屋喜兵衛版（二種有）/六書肆河内屋茂兵衛版/六書肆河内屋和助版/六書肆秋田屋市兵衛等発売本/六書肆秋田屋市兵衛版/六書肆小島伊兵衛版（二種有）/六書肆伊丹屋善兵衛等発売本/六書肆豊田屋宇左衛門等発売本/六書肆河内屋吉兵衛等発売本/
8、文久元年（1861）版　江戸大阪九書肆発売本
9、明治五年（1872）版　十八書肆敦賀屋九兵衛等発行本/十八書肆中川勘助版/十八書肆・書籍会社森本太助発売本
10、明治八年（1875）版　如不及斎・佐竹義脩蔵版本
11、明治十年（1877）版　浪華十三書肆版/十三書肆中川勘助等発売本/十三書肆前川善兵衛発売本
12、明治十一年（1878）版　佐竹義脩分版本（題簽・首巻封面・奥付を除き10の再印本）
13、明治十三年（1880）版　九書肆本/十三書肆本（四種有）/十三書肆補刻本/七書肆五発売人本/十五書肆四発売人本
14、明治十六年（1883）版　十二書肆七発売人本（二種有）/十五書肆三発売人本/十五

書肆三発売人尚書堂本/十五書肆四発売人本（二種有）/十五書肆四発売人尚書堂本/十五書肆四発売人中川明善堂本/九書肆本（二種有）

15、明治三十八年（1905）版　郁文舎・文海堂本

16、明治四十二年（1909）版　千葉久栄堂版

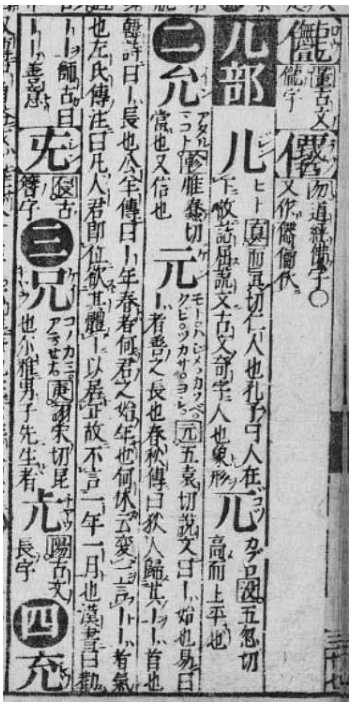
17、明治四十四年（1911）版　千葉久栄堂版

上記に加えて、林（1989）ではこれに3類（安永二年版・安永五年版・弘化四年版）を加える。このほかにも恐らく未報告の版があることと思うが、現在知られているのは上の通りとなっている。

3－3　掲出字数および本文・注文の構成

本書の掲出字数については、岡井（1933）が各巻本文冒頭にある掲出字数に関する記述（【図2】）からそれらを足して「玉篇大全」全巻合計で41362字としている。しかし、筆者が実際に掲出字をすべて数えたところ、全巻の合計は41593字となっており、従来把握されていた数よりも231字多いことが分かった[6]。

【図2】掲出字数に関する記述



【図3】本文例（「儿部」冒頭）

[6] この数は単純な数え間違いの域を超えているようにも思われ、いずれかの段階で本文への増補があった可能性がある。版種ごとの字数差の有無など、今後の調査が必要になる。

「玉篇大全」の大きな特徴のひとつとして、検字方法に画引きを採用していることが挙げられる（部首・本文とも）[7]。日本において『大広益会玉篇』を基にし、部首・本文ともに画引きになった字書のはじまりは、寛文三年刊（1663）『大広益会玉篇』が最初期とされており（岡井（1933）・山田（1959））、その後徐々に画引き字書が広がった。「玉篇大全」はその流れの中にある[8]。「玉篇大全」の部首の数は全部で216であり、この数は『玉篇』の部首の数が542であることを考えると、『字彙』（部首の数214）にかなり近い（『字彙』との部首の出入りについては米谷（2008）参照）。実際、「玉篇大全」の部首の並びは『字彙』と殆ど同じになっている（林（1989））。次に、本書の本文を見ていく（【図３】）。

本文は一字掲出で、両脇に字音が置かれる。掲出字の下に和訓、その下に所属韻、続いて漢文注となっている。漢文注は、宋本『玉篇』（『大広益会玉篇』）の注を用いたものであることが指摘されており（林（1989）・米谷（2008））[9]、これに訓点が加点されている。注文の和訓は宋本『玉篇』由来の漢文注を訓読したものであるが、同じく宋本『玉篇』の漢文注を訓読した天和三年刊『増補大広益会玉篇』（以下、「天和三年」）の和訓と比較すると違いがある（林（1989））。

従って、林氏がいうように「玉篇大全」の和訓には著者の毛利氏の訓読が反映されている可能性があり、言語資料として活用可能と思われる。以下に林氏が出した用例を摘記する。

本文	漢文注	「玉篇大全」	「天和三年」
品	齊也官品也類也衆庶也	ヒトシ　シナ　シナ〳〵＼	ヒトシ　シナ／＼
		タグヒ　モロ／＼	タクヒ　モロ／＼
哉	語助	カナ　カ	コトバノタスケ　ヤ
咻	痛念声	イタム　ナゲク	イタミヲモフコヘ
咬	鳥声	サヘヅル	トリノコヘ
呴	飲也	ノム	サケヲノム
咽	咽喉也	ノンド	ムセフ　ノト

[7] 画数引きの字書は、唐土にあって金代の『五音篇海』や明代の『字彙』をその始まりとするのがよくなされる説明であるが（但し、『五音篇海』は一部画引きにとどまる）、大岩本（2001）によってそれ以前の王太『増廣類玉篇海』（1164年以前成立（佚書））において、すでに画引きが部分的に成立していたことが指摘されている。花登（2007・2008・2011）では、『洪武正韻彙編』（萬暦三十年（1602）以前成立）において部首と掲出字双方が画引きになったとの指摘がある。

[8] 近世の画引き字書についての概要は米谷（2007・2008）を参照。

[9] 宋本『玉篇』の漢文注が長文の場合は摘記される。『大広益会玉篇』に片仮名で音訓の注文を付した最初の本は寛永八年刊（1631）『大広益会玉篇』とされている（長澤（1980））。また、「玉篇大全」は宋本『玉篇』を直接の典拠として用いたわけではないことについては後述する。

上記例から、両本とも宋本『玉篇』の漢文注を読んだと思われるものの、「玉篇大全」と「天和三年」で異なっていることが分かる。例えば、「品」字の場合は「玉篇大全」が五つの注を付けるが「天和三年」は一つ少ない。また清濁も異なる。「哉」「咻」「咬」は「玉篇大全」がやや意訳の感があるが、「天和三年」は直訳している。一方で「咱」は「天和三年」の方が意訳の感が強い。「咽」は「天和三年」が二つに分けて和訓化しているが、この場合は分けずに「ノンド（のど）」とした方が注の原文に適うようにも思われる。

各画数の最後には増補字が加えられているが（【図３】では二画の並びの最後に見える「先」字。四隅に印が付いたもの）、典拠はおそらく『字彙』を用いたものと思われる[10]。本文および注文の具体的な典拠については序文に書名は挙げられていないものの、林（1989）は序文の記述から[11]、画引き且つ『字彙』の増補を経た字書を用いたとして、寛文三年刊『大広益会玉篇』を改編したものと、天和三年刊『大広益会玉篇大全』に近い本文を持つ字書を参考にしたと推定する。

また、首書にも本文と対応する注文が存在する（【図４】）[12]。首書の注文の典拠は本書巻一冒頭に掲載されている百余種の典籍が用いられている[13]。首書の注文は、字音・和訓・漢文注で構成されており、本文にある注文に増す形で加えられている（重複が基本的にない）。首書における各見出し字には「⌂」という印が付されており、これが目印になっている。例えば、【図４】「㠯」字の首書には「ウヅダカフス」と和訓がある。その後『字彙』（㊥字）・『六書正譌』（㊥六）等の注が引かれていることが分かる。

---

[10] 増補字と『字彙』とで注文が一致する。但し、これについてすべての増補字がそう言えるか、直接的な利用か間接的な利用かなど、全面的な検討は未だなされていないようである。林（1989）では、本書に『字彙』の増補があったことを指摘するが、各画末の増補字については具体的な言及がない。

[11] 序文の第２条から第５条までが参考になる。少々長いが以下に引用する（字体は通行のものになおした。〇の数字は筆者による。また、一部訓点・双行注は省略した）。

②近世音訓仍テレ旧ニ欲シテレ便リセントニ検閲ニ破リテニ旧本ノ部ヲ新タニ模シニ梅氏カ之字彙ノ例ヲ。従テニ字画ニ件件有リニ分ツレ之ヲ者。又別ニ撮リニ拾フテ字彙ニ所レ出ス玉篇ニ不ルレ連ネ字ヲ一増シニ加ヘテ音訓ヲ刊リ行テ有リ下流ニ布スル世ニ者上矣

③分画ノ玉篇新旧ノ両編ヘ者不レ弁ヘニ字画製造ノ之義ヲ。謾リニ従ヒレ篇ニ従テレ旁ニ混雑ス。又画数多少ノ之失チ不レ少カラ。且ツ惑ヒレ篇ニ疑ヘシキレ旁ニ者七千字余脱ニ落ス之ヲ

④今所ニ撰編スルニ者改メニ旧本分画ノ之差ヲ。訂スニ音訓之ノ謬ヲ。且ツ本字ノ脱落註釈ノ誤字逐一革ムルレ之ヲ者ナリ也

⑤今所ノニ続補スルニ字ヘ不シテレ出サニ旧本ニ。而モ切ナルニ日用ニ者。又字画異ニシテ而素同キ者。経史及ビ釈典ノ中間出テ庸学難キレ解ジ者。考ヘテニ諸字韻ノ之書ヲ連ネニ系ケタリ之ヲ。毎部画数ノ末ニ包ミテニ囲ノ中ニ記スレ之ヲ者可シレ知ルニ補字ナリトニ矣

[12] 首書は、本文の掲出字のうちすべてに付されるものではない。

[13] 実際には、掲載された典籍すべてが使われたわけではない（先述）。

【図４】本文と首書（「ノ部」五画）

３―４　「玉篇大全」をデータベース化する理由

本書の本文は、唐土の字書に典拠を持っており、字音・和訓・漢文注・字体注も基本的に唐土の字書に掲載されたものを基にしている[14]。この点で、本文・注文が日本でアレンジされた『和玉篇』とは異なっている[15]。近世期には、寛永八年刊『大広益会玉篇』から見られるような、唐土の字書をそのまま利用して片仮名の音訓を付した類のものと（仮にこの系統を玉篇系とする）、旧来からの和玉篇の類とが併存しており、同時代に単字字書には大きく分けて二つのタイプがあった。その後、玉篇系の本文・注文と和玉篇の多くの

[14] 例外として、首書に国書の『和名類聚抄』が用いられている（先述）。
[15] 無論、『和玉篇』と唐土の字書とが全く無関係という訳ではない。直接・間接に影響を受けている。近世期の『和玉篇』のバリエーションについては、山田（1959）附表等を参照。

和訓を付す形式とが合わさって、『字彙』の影響を受けつつ、寛文三年刊『大広益会玉篇』や天和三年刊『増補大広益会玉篇』のような字書が出現するに至ったものと考えられる[16]。そして「玉篇大全」はさらにそれを増補・補訂し、両タイプの融合を一層推し進めた結果であり、近世期における字書のひとつの到達点であった。「玉篇大全」は本文・注文の典拠が殆ど明らかであるが、「玉篇大全」の後継字書は漢文注および典拠表示を大幅に省いており、これらを明示することは「玉篇大全」の一つの特徴となっている。

近世期の字書は「玉篇大全」の後になると、簡略化していく。次に、「玉篇大全」および関係する先行・後継字書の掲出字数・注文数（和訓）を「刀部」で比較した例を【表１】に示す。【表１】には天和三年刊『大広益会玉篇』以下、刊行年順に掲出字数と注文数をまとめた[17]。また、参考として寛永八年刊『大広益会玉篇』（付訓本）の掲出字数・注文数も挙げた。先行する字書から後継の字書までを見たとき、「玉篇大全」において飛躍的に掲出字・注文数が増加し、最大に近づく。

【表１】「玉篇大全」関係字書の掲出字数・注文数比較（刀部）[18]

	刊年	掲出字数	注文数（和訓）
寛永八年刊『大広益会玉篇』	1631	196	331
「天和三年」	1683	205	321
「玉篇大全」	1692	379	613 [19]
「玉篇大成」	1783	389	692
「字林玉篇」	1797	371	624
「字林集韻」	1803	198	419

[16] これらは、『大広益会玉篇』という書名ではあるが、和訓が豊富に付されており、漢文注には訓点も加点されている。さらに、『字彙』によって改編・増補もなされており、宋版以来の『大広益会玉篇』とは本文が大きく異なっている。これら近世の『大広益会玉篇』が『字彙』の影響を受けていることについては、林（1989）、花登（2013）を参照。『和玉篇』にも『字彙』によって改編・増補があることについては、米谷（2005）、花登（2013）が『字集便覧』（『和字彙』）を挙げている。また、天和三年刊『増補大広益会玉篇』にも複数種あるらしく（丁鋒氏より御教示）、注文もおそらく異なっていると思われる。その比較は今後の課題としたい。

[17] 他の部首については稿末参照。各字書の書誌情報も稿末に示した。

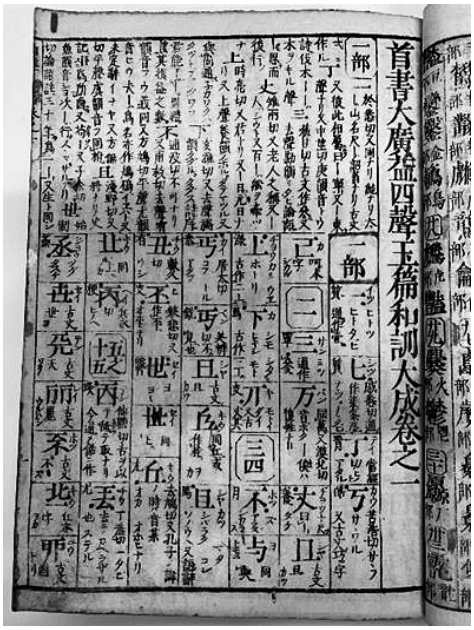
[18] 「玉篇大成」＝『首書大広益四声玉篇和訓大成』、「字林玉篇」＝『新刻訂正新増字林玉篇大全』、「字林集韻」＝『増続字林集韻大全』。

[19] 首書の和訓を含む。なお、【表１】において首書を持つのは「玉篇大全」・「玉篇大成」のみとなっている。

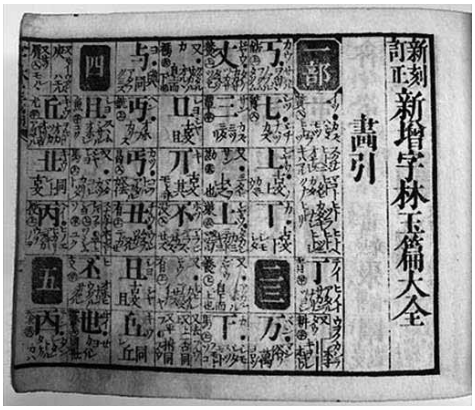
和訓数は「玉篇大全」の後継字書の方がやや多いこともあるが、和訓を含む注文全体としては「玉篇大全」に比べて多くが省略されている（【図１】・【図５】・【図６】・【図７】）。これらから、先行字書が「玉篇大全」で広く収集され、後継の字書において節略されていく様子がうかがえる。

近世期に成立した字書を全てデータベース化することは理想ではあるが、先述の通り「玉篇大全」は当該時期の字書で最も内容が充実しているものであり、その後節略に向かうことを考えれば、まずは「玉篇大全」を比較の基準として検討すべきと考える。本文・注文の豊富さという意味で、「玉篇大全」が近世期の字書で最大規模のものであることから、データベース化する字書としてメリットが大きい[20]。

また、本書のような多数の注文を持つ字書は漢字の読みの注文も豊富であることから[21]、「玉篇大全」データベースは、今後日本語学だけでなく、文学、史学など他分野にも近世期の漢字の読みを提供できるものになる。



【図５】「玉篇大成」本文・注文



【図６】「字林玉篇」本文・注文

[20] 玉篇系や『和玉篇』に関係する字書だけでなく、他の辞書の類、例えば『節用集』の和訓などとの比較にも用いることも可能になると思われる（『和玉篇』と『節用集』についての関係については、米谷（1997・2005）、佐藤（2000）参照）。

[21] 注文の典拠が示されていることは、漢字の読みの由来が分かるということであり、情報を提供する上で優れた点であるといえる。

【図７】「字林集韻」本文・注文

【図８】データ化範囲（太枠内）

4　「玉篇大全」のデータ化に用いる底本

今回のデータ化に際して底本にするのは、早稲田大学図書館の元禄五年版（鍵屋善兵衛・澤村昌益版）である。その理由としては、元禄五年版が「玉篇大全」の成立直後の版であること[22]、ウェブ上で容易に閲覧ができることによる。

今回は【図８】の太枠内に示す範囲で、本文の掲出字・字音・和訓のデータ化をひとまず行う。今後「玉篇大全」のデータベースを他のデータベースと連携する際に、和訓をキーにすることを想定している[23]。

[22] 関場氏によれば、元禄五年版の中でも無刊記本が初版である可能性があるという。

[23] 科研（挑戦的研究）「異種古辞書間におけるデータ連携モデルの構築」（代表：藤本灯）において、古辞書を連携し、横断検索できるデータベースのモデル構築を進めているが、その際に掲出字を共通のキーにすると、古辞書間の字体・字形の差をどう埋めるか、どのように同定するかが問題となり連携がしづらい。そこで、従来の連携方法を改め和訓で連携することにより、共通項で括りやすくすることを提案している。今回のデータベースは上記作業の実践例でもある。

5　まとめ

以上、「玉篇大全」研究の進捗、本書の構造の確認をしてきた。本稿で述べたことをまとめると以下の通り。

①「玉篇大全」の研究は書誌学的研究に集中している。
②「玉篇大全」は『大広益会玉篇』を改編した近世期における字書の到達点ともいうべき字書である。
③「玉篇大全」データベースは本文・注文の分量から見て、本書の先行・後継の字書、または同時代の辞書との比較検討の基準となりうる字書である。
④「玉篇大全」データベースによって、近世の漢字の典拠が明確な読みを豊富に提供できる。

本稿ではデータベース作成の際に問題となる和訓の仮名遣いの異なりの問題や（例、サイワヒ・サイハヒの類）、和訓のどの要素で検索がヒットするようにするかなど実用面については触れなかった。これらについては、データベース公開後に適宜説明を行いたい。なお、本データベースは2023年度中に巻一より順次HDIC Viewer（https://viewer.hdic.jp）にて公開予定となっている。

［参考文献］

大岩本幸次（2001）「『群籍玉篇』に窺える「増廣類玉篇海」及び「廣集韻」について」『人文研究』（53）（「王太「増廣類玉篇海」と『群籍玉篇』また『五音篇海』」『金代字書の研究』所収）
――――――（2007）『金代字書の研究』東北大学出版会
――――――（2011）「毛利貞齋『増続大広益会玉篇大全』所引の小学書について」『東北大學中國語學文學論集』（16）東北大学文学部中国文学研究室
――――――（2013）「『増続大広益会玉篇大全』にみえる中国字書について」『中国学志』（28）大阪市立大学中国学会
大橋敦夫・柳浦恭（1994）「レオン・ド・ロニー『若干の日本語辞書に関する考察』（LEON DE ROSNY；Remarques sur que lques dictionnaires japonais）〈1858年〉訳解」『紀要』（17）上田女子短期大学
岡井慎吾（1933）『玉篇の研究』東洋文庫
岡島昭浩（2001）「元禄の辞書―中世辞書からの継承と脱却―」井上敏幸・上野洋三・西田耕三編『元禄文学を学ぶ人のために』世界思想社
岡田希雄（1936）「元禄期の辞書界」『立命館文学』（３－８）立命館大学人文学会
菊田紀郎（1985）「『増続大広益会玉篇大全』と『和名類聚抄』注文」『山形県立米沢女子短期大学紀要』（20）山形県立米沢女子短期大学
佐藤進（2021）「毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記について」『人文研究』（203）神奈川大学人文学会
佐藤貴裕（2000）「節用集の世界――典型と逸脱」『月刊しにか』（11－３）大修館書店

関場武（1977）「毛利貞斎編「増続大広益会玉篇大全」」『芸文研究』（36）慶應義塾大学藝文学会
———（1992）「漢和・漢語辞典の歴史―江戸から明治へ」『學燈』（89－５）丸善
———（1994）『近世辭書論攷　：　早引・往來・會玉篇』慶應義塾大学言語文化研究所（『近世中世辭書論攷』所収）
———（1997）『近世中世辭書論攷』博士論文（慶應義塾大学）
———（2007）「毛利貞斎編「増續大廣益會玉篇大全」」関場武編『古文書の世界』慶應義塾大学文学部
長澤規矩也（1980）「和刻本辞書字典集成第二巻解題」長澤規矩也編『和刻本辞書字典集成』（２）汲古書院
花登正宏（2007）「《洪武正韻》在中国辞書史上的地位」『語苑擷英』（２）大百科全書出版（中国）
————（2008）「収録字の配列方法より考察する中国辞書史の構想」『東北大學中國語學文學論集』（13）東北大学文学部中国文学研究室
————（2011）「我が國における『洪武正韻彙編』の受容」『学林』（53・54）立命館大学
————（2013）「『字彙』の我が國字書史上に與えた影響」『日本中国学会報』（65）日本中国学会
林義雄（1989）「日本の字典　その三」『漢字研究の歩み』（漢字講座２）明治書院
福田雅史（2003；公開）「「ヒキヅナ」という漢字」
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000964/hikiduna.htm（最終閲覧日2022/09/19）
水上雅晴（2014）「琉球地方士人漢籍学習の実態―書入れに着目した考察」『琉球大学教育学部紀要』（84）琉球大学教育学部
山田忠雄（1959）「「漢和辞典の成立」附録本邦辞書史概説附表―会玉篇から漢和辞典へ―」『国語学』（39）国語学会
————（1981）「旧刊単字字典の再摺」『近代國語亂書の歩み』（上）三省堂
米谷隆史（1997）「元禄期の節用集について」『語文』（69）大阪大学国文学研究室
————（2005）「両点本節用集の成立をめぐって」『国文研究』（50）熊本女子大学国文談話会
————（2007）「近世初期刊行の画引字書について」『国語文字史の研究』（10）和泉書院
————（2008）「延宝期より元禄期までの画引字書について」『国文研究』（53）熊本女子大学国文談話会
劉冠偉・李媛・池田証寿（2015）「平安時代漢字字書総合データベースの拡張と和訓対応」『情報処理学会研究報告　人文科学とコンピュータ研究会報告』（４）情報処理学会

［使用文献］

・宋本『玉篇』（大中祥符六年刊『宋本玉篇』（澤存堂本）。北京市中国書店（1983））
・寛永八年刊『大広益会玉篇』（寛永八年刊『大広益会玉篇』。長澤規矩也編（1980）『和刻本辞書字典集成』（２）汲古書院）
・『字彙』（寛文十一年刊『字彙』。長澤規矩也編（1980）『和刻本辞書字典集成』（３）汲

古書院）
・「天和三年」（天和三年刊『増補大広益会玉篇』（澤村昌益・小野善左衛門）。国立国会図書館蔵）
・「玉篇大全」（元禄五年版『増続大広益会玉篇大全』（鍵屋善兵衛・沢村昌益）。早稲田大学図書館蔵）
・「玉篇大成」（天明三年刊、寛政三年再刻『新刻増字大広益会玉篇大成』（風月庄左衛門ほか）。架蔵）
・「字林玉篇」（寛政九年刊『新刻訂正新増字林玉篇大全』（序文による。刊行者不明）。架蔵）
・「字林集韻」（享和三年刊『増続字林集韻大全』（吉文字屋市左衛門・敦賀屋九兵衛・秋田屋市兵衛）。架蔵）

［付記］

資料利用・閲覧に際して、国立国会図書館、早稲田大学図書館よりご厚誼を賜りました。また、劉冠偉氏から「玉篇大全」の本文データを一部提供していただきました。本研究は、科研費「異種古辞書間におけるデータ連携モデルの構築」（代表：藤本灯）、「『色葉字類抄』の語彙研究および総合データベースの構築」（代表：藤本灯）の支援を受けています。

本稿は、2022年３月10日に行われたシンポジウム「古辞書・漢字音研究と人文情報学」での発表に基づいています。席上その他にて様々なご意見を頂戴しました。記して感謝申し上げます。

［【表１】補足表］

力部	刊年	掲出字数	注文数（和訓）
寛永八年刊『大広益会玉篇』	1631	85	46
「天和三年」	1683	87	138
「玉篇大全」	1692	169	298
「玉篇大成」	1783	163	302
「字林玉篇」	1797	159	320
「字林集韻」	1803	113	231

厂部	刊年	掲出字数	注文数（和訓）
寛永八年刊『大広益会玉篇』	1631	56	81
「天和三年」	1683	57	79
「玉篇大全」	1692	136	185
「玉篇大成」	1783	127	158
「字林玉篇」	1797	120	188
「字林集韻」	1803	63	121

冫部	刊年	掲出字数	注文数（和訓）
寛永八年刊『大広益会玉篇』	1631	52	62
「天和三年」	1683	52	58
「玉篇大全」	1692	111	152
「玉篇大成」	1783	109	146
「字林玉篇」	1797	107	161
「字林集韻」	1803	73	109

又部	刊年	掲出字数	注文数（和訓）
寛永八年刊『大広益会玉篇』	1631	39	53
「天和三年」	1683	42	66
「玉篇大全」	1692	76	105
「玉篇大成」	1783	90	112
「字林玉篇」	1797	62	111
「字林集韻」	1803	39	84

［入力中データサンプル］（竹部）

page	line	no	id	glyph	parts	jion_R1	jion_R2	jion_L1	jion_L2	wakun1	wakun2	wakun3	wakun4	remark
6_1a	3	1		竹		チク				タケ				
6_1a	3	2		竺		トク		チク		アツシ				
6_1a	3	3		竻		テイ		チャウ		カゴ				
6_1a	3	4		竻		ロク				タケノネ				
6_1a	4	1		竹		キ								
6_1a	4	2		竺		セン				シレタケ				
6_1a	4	3		艾		キ				タケ				
6_1a	4	4		竹		キ								
6_1a	4	5		竿		カン				サホ				
6_1a	5	1		竽		ウ								
6_1a	5	2		笑		ヨソ				タケノナハ				
6_1a	5	3		笈		サ				タケ				
6_1a	5	4		笘		キ				タカムシロ				
6_1a	6	1		笊		ホウ								
6_1a	6	2		学		シ								
6_1a	6	3		笹		チ								
6_1a	6	4		笏		ウン								

［データ入力凡例］

page　：「巻_丁表裏（a/b)」(例　8 _ 1 a）の形式で入力する。
line　：本文行数を入力する。
no　：一行内の上からの順番を入力する。
id　：管理番号を付与する際に入力する。
glyph　：本文掲出字を入力する（「漢字字書データベース」康熙字典データから引用)。
parts　：本文掲出字が入力できなかった場合に、作字用に漢字の構成部位を入力する。
jion_R1　：漢字の右側の字音 1 個目を入力する。
jion_R2　：漢字の右側の字音 2 個目を入力する。
jion_L1　：漢字の左側の字音 1 個目を入力する。
jion_L2　：漢字の左側の字音 2 個目を入力する。
wakun1　：漢字の下の和訓 1 個目を入力する。
wakun2　：漢字の下の和訓 2 個目を入力する。
wakunX　：漢字の下の和訓 X 個目を入力する。
remark　：不明点、特記事項を入力する。

その他

・用例の無い箇所は空欄のままとする。
・入力する英数字はすべて半角で入力。
・清濁、仮名遣いはいずれも原文ママとする。
・促音・拗音は大字で入力する。
・異体仮名は現行の片仮名に直して入力する。(例　「子」は「ネ」に直す）
・注文の改行は無視し、続けて入力する。
・注文の間にある「。」の記号は入力しない。

［使用データベース］

「漢字字書データベース」康熙字典データ
https://github.com/cjkvi/cjkvi-dict/blob/master/kx2ucs.txt（最終閲覧：2022/03/09）